

いろいろな

じやんに

ちやうざいせん

空想科学小説と言えば、タイムマシン、アンドロイド、人類以外の知的生命体。

それらが三拍子揃って、突然現れたときには、普段は冷静で驚いた顔を人に見せたことがないような私であっても流石に驚嘆した。朝、目が覚めた私の目の前に、見たこともないような機体から見たこともないような服装の生き物と一見してアンドロイドには見えないアンドロイドが登場した。思わずベッドの上で、後ずさりをして声が出た。

「ふわあああああつ」「ぎよおおおおつ」「ぎゃびいいい」「ぷぎい」

私が驚いて声を上げるのと同時、向こうも驚いて悲鳴を上げた。

大学を出て就職をして二年。一人暮らしをはじめて一年半。好きな人がいても恋人にはなれそうにもないまま一年。地デジ対応テレビに買い替えて半年。外食ばかりじゃ体に悪いと思い自炊をがんばりだして三ヶ月。夏の繁忙期が終わって一ヶ月。へたくそな自炊で発生したノロウイルスで入院の一週間。短い夏休みが三日間。

それなりに平凡で平和な日々が続いていた。ずっと続くんだと思っていた。

そして、得体のわからないものに遭遇して一時間。時間は午前九時。

私は彼らの話を聞きながら、混乱しながらもようやく事情が呑み込めてきた。

よくしゃべるアンドロイドがリーダーらしい。一見してアンドロイドには見えないが、本人がそう言うのだから、そうなのだろう。私に説明をしてくれる。

「ええ。わたしたちは西暦4500年くらいからきました。4500年位というのは、目算です。あなたの時代に合わせるとそうなります。わたしたちのいる時代はもう、西暦ではありません」

「え？」

「いつまでも西暦は続きません。中国が戦争に勝って、そのあと、インドが世界征服をするのですから。そのあと、また各地で革命が起こり……。失礼。詳しい事情は話せませんね。あまり話すと、あなたを殺しに時空管理局の人が来ます。ただ、いつ何が起こるかなどわからないのですよ。わたしたちもこうして、本来行くべき場所に、辿りついてはいないのですから」

そう。彼らは、歴史調査のために、日本史でいう鎌倉時代を目指して何故か私に辿りついたらしい。それにしても千年の誤差が生じるなんてこのタイムマシン、不良品ではないのだろうか。

「辿りついてはいないのですからって、随分とのん気な構え方をするものだな」

「ぴりぴりしても仕方がないのです。同じ時間を過ごすのならば、機能停止のその日までに過ごす時間は、楽しいものであった方が良く思うのです。わたしのモットーは毎日、楽しくです。まあ、彼らは違うようですけど」

ロボットがそう言った先には、私がみたことの無いような生き物とタイムマシンがぎゃーぎゃー喚いて喧嘩をしていた。

「なんでお前、俺の言うた通りに動けへんねん！ そやから、ぼんこつ言われるんや」

「の、乗せてもらえてるだけでもありがたいと思え。ぼ、僕は一生懸命やったんだ。それでも一度に三千年以上遡るなんて僕のスペックじゃあどうしたって無理なんだよ」「あほか！ 気合

いじゃ気合い。スペックがなんやらってそんなもんでごまかしとるから、おまえはあかんのや」
「だったら精神論でタイムスリップしてみろよ！」

「やったるわ」

タイムマシンがぶち切れた。私が見たことのないような生き物はうんうん唸り始めた。まさか本当に気合いでタイムスリップをはじめようとでもいうのか。人類ではない知的生命体です、とロボットは説明をしたが、あまり知的ではないようだった。

「ありやあ、なんなんだ？ 漫才か？」

「出発からずっとああいう感じですよ。聞ってる分には楽しいんですがね。もう少し仲良くできないものかと思ってるんです。タイムマシンの方が、対馬無新くん。おさるさんみたいなの方が、和久野類瀬さんです。旅は道連れ、って言いますから、未来に帰るころには仲良くなっていると良いのですが。今日が初仕事なんですよー。ああそうだ。申し遅れました」

ロボットはかばんから名刺を取り出した。

「私は歴史の調査をしております、六条綺羅愛と申します」

「きらめ？ ものすごいロボットぽくない名前だな。いや、ぽいといえばロボっぽいか」

「仕方ありません。私の親がつけた名前ですから。自分では決められないのです」

それを聞いて私は六条綺羅愛とは仲良くなれそうな気がした。

「そうだよな。私は樽見柑太郎。かんは蜜柑の柑だよ」

幼いころ、蜜柑という名前と呼ばれていた。祖父母は無類の蜜柑好きだった。

「失礼ですが、ご両親は一体、何を考えてそのような名前に？」

私が答える前に、和久野類瀬が叫んだ。

「あー！ もうわかった俺の負けや負け。おい。六条いつまで原始人と話してんねん！ はよ燃料探しに行こうや」

その言葉を聞いて私はむっとした。確かに、彼らからすれば私は原始人かもしれないが面と向かってそう言われると気分の良いものではない。私は和久野に向かって言った。

「誰が、原始人だって？」

「お前やおまえ。おまえ以外に誰がおんねん。言わんでもわかるやろう。それか、なんや。喧嘩売ってんのか。ええ？」

「喧嘩を売ってんのはあんただろ。気合いでタイムスリップなんかできるわけないのにしようとするくらい馬鹿なのに。人を原始人呼ばわりするなんて」

「馬鹿やて？ はっ、はっーん。おまえ、俺に喧嘩売ってんなあ、そうやな。よっしゃ買っ……、ぐへえ」

「和久野さん。そこまでです。燃料探しに行きましょう。すみません、ここに対馬くんを残して行っても良いですか。すぐに燃料を見つけたら、出発しますので。それほど時間はかからないと思います！」

そう言うや否や六条は和久野の襟首を掴むと半ば引きずるようにして私の部屋を出て行ってしまった。さすがロボット。馬力は相当あるようだった。

今日は土曜日だったので会社は休みだった。ノロウイルスで休んだ分、土曜日も出勤すべきだと申し出たが、上司に却下されたのだった。上司曰く、そんな暇があるのならウイルスに負けない体を作れ、とのことだった。上司は筋肉むきむきで女子社員からは陰でビルダーというあだ名で呼ばれていた。

対馬と話す、なんともネガティブなタイムマシンである。

一言話すごとに「……。」が欠かせないくらいのネガティブさだ。

「僕は、本当に、駄目な子なんだ……。みんなはちゃんと、ガソリンで動くし、太陽光でも動くのに。僕は、未だにそれらに対応できていない……。それに今日だって二人に老いていかれた……。ちゃんと変形する燃料を残しておけば僕だって動けたのに……」

「……」

ふ、不幸自慢か。それならば、私だって負けてはいない。

「き、君も大変そうだが、私だってこれまで大変だった。特にこの夏は、死ぬかと思ったよ。まさか自分の作った料理で死にかけるとかなんて思いもしなかった。私はとても幼いころに両親に捨てられてね。母方の親戚に、祖父母に育てられたんだが、彼らが大層、蜜柑が好きでね。私に何もしてくれなかった両親はせめて普通の名前だけでもつけてくれたらよかったのに。名前さえ、決めずに私を棄てたらしい。だったら、生むなって、なんで私を産んでから棄てるんだっていう話で。いや、でも今は幸せだよ」

私がふっと顔を上げて対馬の方を見ると、ぼろぼろとオイルをこぼして泣いていた。私はこれまたぎよっとして、慌ててバスタオルを取りに行った。

「君はガソリンで動かないはずなのに、どうしてオイルが出るんだ？」

ふとした疑問だったが、対馬は答えなかった。ものすごく私に同情してくれている。

「なんて可哀想な人なんだろう。僕にはちゃんと両親もいて、僕は不良品に近いけれどでも、それでもちゃんと僕を教育してくれて就職先も面倒を見てくれた。ここに来る時も見送りに来てくれたんだ。だから、僕はがんばらなきゃいけないのに。初仕事でぽかやるなんて……」

あれ？ 同情してくれていたはずがまた不幸自慢に戻る。話を逸らそう。

「でもまあ、あいつらが燃料とってくれば、それで大丈夫なんだろう。じゃあ、何も問題ないじゃないか」

「あの二人は、今朝初めて顔を合わせて、未来からここに来る間、自己紹介しかしてないんだよ。僕と和久野は相当仲が悪いけれど、あいつらだって今日が初対面なんだし、上手くやってるかどうか不安なんだよ」

「まあまあ、見えないことを心配していたって仕方がないじゃないか。対馬君は変形するとどんな感じになるの？」

「どんなっていつでも、説明が難しいなあ。この時代だったら、そうだなあ。ロボットアニメのロボットを百倍洗練した感じかなあ」

「へー。格好良いんだ。そうだ、一つだけどうしても知りたいことがあるんだけど」

「僕にできることなら、喜んで。何が、知りたいんですか？ 時空ネットで何でも検索できるんですよ。どの時代にも未来のデータベースにアクセスできるんです」

「あと二十年先のことなんだけれど、……」

対馬と一時間位話して割と親しくなったころ、六条と和久野が戻ってきた。手に燃料を持っている。

その燃料とは。

「ちょ、六条さんんっ？ それは一体、何」

「何って、燃料。対馬くんはこれがないとあと千年遡れないんだよ」

「ここで、捌くのか。ていうかなんでそれで対馬くんが動くんだよ」

「台所お借りします」

「ちょっと、待て！ 肉なら冷蔵庫にたくさんある」

ものすごい鳴き声をあげる鶏をもとの場所に戻して来いと言った。六条と和久野は不満そうだったが、肉をスーパーで仕入れてきてやると言ったらしぶしぶ納得して戻しに行った。私は近所のスーパーに肉を買いに行った。

「それで、対馬君は何が食べたいんだ？」

「塩かけて焼いてくれたらそれで十分っす」

肉で動くタイムマシンとは。しかも、一キログラムで千年遡れるという。めちゃくちゃ高性能じゃないかと褒めたら、対馬はうれしそうに照れ笑いをしていた。戻って来た六条と和久野と対馬と私で昼食を取った。焼き肉である。

「美味しい。とんだ寄り道やったが、この原始人で良かったわ。親切やし。ありがとう」

「本当にありがとうございます。これであと千年遡って仕事に行けます」

「柑太郎元気で。励ましてくれてありがとう」

そうして三人は過去に消えていった。私は焼き肉の匂いが残る部屋で、さっきのは夢だったのかと錯覚した。

しかし、一時間後、夢ではないことを突き付けられる。私に対馬から聞いたことがまずかったのだろうか。

「あなたを殺しに来ました。時空管理局の者です」

「あなたは未来の情報を手に入れたことで、欲に目がくらみ、人格までもが変化して最終的に人類の存亡を脅かす存在となるのです。ですから、わたくしが殺しに来ました。ちなみに今日が初仕事です。本日付で配属されたものですから」

この話し方、まるで六条と同じである。しかし、顔は似ても似つかない。いや、目だけが同じ部品でできているかもしれない。

「思い残すことはありませんか。なんなら遺書を書く時間をとります。その間わたくしは家の外で待機しておりますので。どうぞ」

どうぞ、と彼女から差し出されたのは、筆とすずり、紙。私が怪訝な顔をして見ていると彼女は、懐から端末を取り出してなにやら検索を始めた。

「はっ。わたくしとしたことが。申し訳ありません。時代を間違えておりました。この時代はボールペンとパソコンですね」

違う。ボールペンでパソコンに遺書は書けない。いや、白いパソコンなら可能かもしれないが。

「遺書は書きません。私は死なない。こんなところで死んでたまるか」

「いいえ。わたくしが殺すのです」

「そう簡単に殺されてたまるか」

「なぜ、そう思われるのですか？」

「そりゃあ、未来の情報を手に入れて、金儲けができると思ったからだ」

「ではやはり、殺すしかないようですね」

「うっ……」

私は逃げ場を探したが、部屋の唯一の入り口を彼女に塞がれていた。窓から飛び出てもどちらにせよ、死んでしまうかもしれない。彼女が私の頭に手をかけた。

すぐに私は気を失った。

「わたくしが殺すのは、命ばかりではありません。この時代なら、命を奪うことでしか口封じはできなかったのかもしれませんが、わたくしのいる時代では、『記憶』を殺すことなんて造作もないことですよ？ もちろん、後遺症なんて残りません。普通に暮らしていけます。普通に、ね」

そうして、私は、今朝の出来事を忘れたらしい。

かくかくしかじかそういうことだから、私が少し遠出をして高速道路を使うとき、はそれはものすごいことになる。

私が彼らを認識できると彼らに気づかれた瞬間、彼らは一斉に私の傍へと寄ってくる。これが、怖いのだ。見えるようになって数ヶ月経つが、未だに慣れない。全便器のトイレの神様が一斉に私に詰め寄って、もっと見える人を増やすのにはどうしたらいいのかとか、便器の欠けているところをどうにかしてくれだとか、存在周知のための方法は他に無いのかとか、私が聞き取れているかいもないかも気にせずにかくし立てるのである。

「うるさいっ！」と言ってしまえば楽なのだが、何もない場所へ怒鳴ると周りの人の視線が突き刺さる。最初はそれも構わずに怒鳴っていたが、トイレの後、売店へ行っても食堂へ行っても視線が痛いので、怒鳴るのは止めた。代わりに、ととに代弁してもらうようになった。ととは上水道を通じていろんな場所を冒険しているらしい。私が何時にどこのサービスエリアでと言うと、らじゃー！ とキュートな返事が返ってくる。一体時速何キロで移動できるのだろうか。ととが私の言った時間に遅れたことは無かった。

しかし、今日のサービスエリアは新しく、トイレの数が非常に多かった。

『うるさいっ。せつこちゃんはね、いま、はいにようしてるの。あなたたちもトイレのかみさまのはしくれなら、みまもりなさいよ！』

いや、別に見守らなくてもいいんだけど。静かにしてくれればそれはそれで。

『はっ。あんさん、見ん顔やなあ。まだ若いっちゃんか。よお見ると、まだ生まれて間もない小童やないかい』

『あーら。そんな子がどうしてここに？ 家のトイレはどうしたのかしら？』

口々に話したいことを話していた神々たちは、ざわざわし始め、ととに注目する。『しゅっちゃんさーびす？ っていうの。わたしはせつこちゃんをまもるの！ だって、わたしはせつこちゃんのいえのといれのかみさまだから』

仁王立ちして堂々とかつ偉そうに、ととは言う。でも、私は知っている。声がかすかに上ずっていることも、袴でよく見えない足がぶるぶる震えていることも、見慣れない大人の神様たちを恐れていることも。

『だから、せつこちゃんがどこに行っても、わたしがまもるの』

それなのに、精一杯がんばって強がって、私を守るだなんて言うのととのことをとても愛おしく思った。ああもう、どうせ見知らぬ他人だ。痛い視線が刺さろうとも、売店で変人を見るような目で露骨に避けられようと、食堂で周りに人がいなくなったとしても。

それでも、私は。

私にとって大切なのは。

私はととを抱きしめた。もちろん、この手は空を切る。それでもいい。

「無理しなくても、大丈夫だよ、とと。もう大丈夫だから」

車に戻って、一緒に出かけ、車で待っていた友人に話すと
「節子それ、素面で言うてんの。病院行った方がええで」と通院を勧められてしまった。

トイレの神様

トイレには神様がいるという。そんな音楽が聞こえてきた。しかし、トイレ掃除をしている私は思うのだ。もし、ここにそんな神様がいたら、さぞかしうるさいだろうな、と。

私の勤めている清掃会社は、オフィスやスーパー、パチンコ店、ショッピングモールの清掃を請け負っていた。それぞれに楽な場所だったり、辛い場所だったり、時間帯が朝早くだったり、よる多くだったり、いろいろな特徴があった。私は朝早く起きるのが苦手だったため、お昼から深夜の仕事を選んでいた。

今日、私が掃除することになったのは、映画館のあるショッピングモールだった。チーフから担当を割り振られる。ローテーションで平等に決めるとというのが、方針だったが平等になどなるはずもない。毎回掃除する場所が変わるのに、平等なんてありえない。

「またトイレかあ」

私は今月三回目のトイレ掃除班に入れられた。班と言っても男一人、女一人である。男女別にそれぞれのトイレを掃除するのだから、まだましだと言える。労働環境がもう少しきつくなると、男女も何も区別もへったくれもなく、どちらのトイレも掃除させられるらしい。

「よろしく」

「うっす」

私は、トイレ班のもう一人に声をかけた。班と言っても名ばかりだ。他の班みたいに掃除場所の打ち合わせも無いので黙々と仕事ができる。口下手な私にとってそれは好都合だった。

早速、掃除道具を持って、映画館のトイレへ向かう。

映画館のトイレは、一度にたくさんの人数を収容できるように設計されている為、個室が多い。全てを掃除するのも一苦労だ。見取り図を見てため息をつく。数を数えてからバケツに水を汲んだ。

そのときだ。

館内のBGMがするりと耳に入って来た。「トイレ」という単語が聞こえたから水を止めて、耳を澄ました。トイレには神様がいるという。

——馬っ鹿じゃないの。いるわけじゃない。だいたい、いるんだとしたら、もうちょっと使う人に綺麗にトイレを使わせることがどうしてできないのかしら。毎回毎回、見ず知らずの人の便を拾うのには辟易させられているのに。便をこぼしてそのままにしていく人には、罰を与えてよね。

私は心の中で悪態を吐いた。蛇口をひねってバケツの水を一杯にする。トイレ掃除の始まりだった。今日は休館日なので思い切り水を流すことができる。とはいえ、個室にまで思い切り流すとトイレトーパーにかかってしまうので注意が必要だった。ブラシと洗剤で便器を磨きあげる。一時間かかって半分くらいを終えたころだっただろうか。

.....すまんのう。すまんのう.....

「ん？」

私はきょろきょろとトイレを見回した。誰もいない。当たり前だが、休館日なのでショッピングモール内に人はいても、このトイレ近くにはトイレ掃除班のもう一人しかいないはずだ。私はブラシをバケツに突っ込むと、男子トイレへ向かった。

「あれ？ どうしたんすか？」

「いまさっき、こっち来なかった？」

「いや。ずっと掃除してたっす」

「そう？ 変なの」

空耳かな。最近、耳がきーんってすることが多いかもしれない。うん。空耳に違いない。私は女子トイレに戻って、再びブラシを掴んだ。

「ありがたやあ。ありがたやあ」

今度ははっきりと聴こえた。空耳などではない。しかし、人の姿は無い。

「誰なの?!」

「わしじゃよ。上におるわ。見えんのか？」

私は視線を上を上げた。そこにいたのは、老人だった。いや、ただの老人ではない。空に浮いている。その上、半透明で後ろの壁が透けて見える。つまり、これは、幽霊？

「わあああつ。ゆ、幽霊？」

私は、その場から後ずさった。運の悪いことに、そこは一番奥のトイレだった。右列が終わったので左列の一番奥の掃除をしていたのだ。震える足で逃げようとするが、それはできなかった。なぜならば、奥から二番目のトイレにももう一人いた。個室からひよこっと顔を出していた。奥から三番目にも、右列の一番奥にも、二番目にも。よく見ると、すべての個室から半透明の人が体の一部を出していた。

「ぎやああああつ」

私はもう、失神寸前だった。しかし、トイレで倒れたくない。その一心で持ちこたえた。普段、掃除をしている場所である。どれだけ汚いかは身を持って知っている。

「.....っはあ」

ようやく息を落ち着けて、私はこの異様な光景をなんとか受け入れようとした。最初に私に話しかけてきた奴と会話を試みた。

「幽霊などとは、失礼な。わしはそんなものではない」

「じゃあ、一体何なんです。半透明ですよ。すけすけですよ」

「わしは、トイレの神様じゃ」

「はあ？」

怪訝な顔になって私は何言ってんだこいつと思った。

「信じておらんようじゃな。よかろう。みんなで説明じゃ」

外見は還暦を通り越して十年ほどの七十歳くらいのおじいさん、自称トイレの神様が言う。

「……みんな、で？」

それはつまりこの19個あるトイレから一人ずつ、トイレの神様とやらが出てくるというのだろうか。そんな疑問に答えるかのように、わらわらとトイレから出てきた。お爺さんを含めてちょうど19人いた。壁際に囲まれるような形になって私はその場から動けずにいた。どうしよう、まじで。

「僕らが見える人が来るなんて、とっても久しぶりだね。じいじ」

「じゃろう。せっかく、見えるんじやから説明じゃ」

「私たちはトイレの神様です。先日、ようやく存在が明らかにされてきましたが、それでもまだまだだと考えています」

「存在周知のために、楽曲のテーマにさせてもらったり、その楽曲で紅白に出場して頂いたりしましたが、それでも、まだ我々を見える人はごくわずかしかないのです」

「ですから、もしあなたに何か才能がございましたら、我々を周知する手助けをしてほしいのですが」

そう言われて私は戸惑った。私にできること？ 何だろう。作曲なんて無理だし作詞だってできない。絵もからっきし駄目で、下手くそで、ましてや漫画も描けない。

「うーん」

私が悩んでいると、おじいさんが雑談を始めた。昔話に花が咲く。

「わしも若いころは、血気盛んでのう。いちいち罰を与えていたんじやが、年をとるにつれて丸くなってな」

「そうやなあ。俺も若いころは、後先考えずにやってたわ」

「私だって、武勇伝があるのよ」

「僕もすごかったんだ」

みなこぞって過去の事を回想する。しかし、今はリタイアしているらしい。私は思ったことを呟いた。

「……役立たず」

ぼそと言ったはずなのに、実体を伴うのは私だけだったから皆にまる聞こえだった。19人のトイレの神様たちが、怒りだす。

「何を言う、小娘が」

「そうじゃ。そうじゃ。だったら、わしらの本気を見せてやろう」

とても嫌な予感がした。

そして、その予感は的中する。

「そりやああああっ」

「ふんぬうううっ」

「てやあああああっ」

あれから、数ヶ月が経過した。依然としてその存在は世間には広く知られていないが、トイレには神様がいます。ひとつのトイレに一人、います。私の家のトイレにもいるし、もちろんあなたの家のトイレにだっているのだ。

私の家のトイレの神様は、まだ新しいトイレだからだろうか、年端もいかない子どもだった。トイレの古さによって神様の年齢が決まるわけではなさそうだが、一体どういう要因で彼らの見た目や年齢が決まっているのか、不思議でならない。

あの日、映画館の掃除で彼らを認識できるようになってから、私はどこのトイレに行っても神様に会うので、若干トイレに行くのが嫌になっていたのだが、家のトイレの神様はとても可愛くて、私は気に入っていた。

仕事が終わって、くたくたになって部屋の扉を開ける。一人暮らしなので誰もいない。

「ただいまー」

と言っても返事なんて来なかった。数ヶ月前まではそうだった。

しかし、今は違う。

「おかえりなさいーい」

子どもの可愛らしい声が部屋に響く。聴こえるのは私だけなのだが。

「疲れたあ。今日も重労働だったよ」

「おつかれさまです、せつこちゃん。ととはきょうもいい子にしてたよ？」

とびきりの笑顔で玄関に駆けてきたのは、私の家のトイレの神様のととだ。名前に関しては、トイレに書いてあったから、というネーミングセンスも何もない命名である。ととは上目遣いでこちらを見上げている。とっても可愛い。

「偉い偉い」

思わず私はととの頭をなでようとした。しかし当然、実体は無いのですり抜ける。「ああ。やっぱり」

仕方がないので私はととの頭の上、ぎりぎりのところで手を左右に振った。一見して撫でているように見えるだろう。それでととは嬉しそうに笑った。

「えへへ」

もう可愛くて仕方がない。目に入れても痛くないかもしれない。いや、実際痛くないだろう。実体がないのだし。

「あのね、せつこちゃん。ととはきょうヒマだったから、せつこちゃんのために情報収集をしたんだよ」

ととはまだ幼い少女の外見をして、話す言葉もほとんどがひらがなのになぜか「情報収集」だけは漢字で読むことができる。

「ええっとねえ。せつこちゃんのしりたがってた、あれ？ なまえなんだっけ。なまえはわすれちゃったけど。そのひとの情報をがっちりつかんできたんだよ？」

私は昨日、大人気グループの普段の生活が知りたいなあとテレビを見ながらぼそっとつぶやいたのを思い出した。まさか。

「掴んできたってどういうことなの」

「ええとねえ。しごとがおわって、いえにかえって、はいせつ。それから、すぐにねむっていたよ。すごくつかれてたんだろねえ」

「見てきたの!？」

「そうだよー」

どうしてこの子はカメラを持つことができないのだろう。いや、持てたら持てたでそれは犯罪になってしまうけれど。しかし、惜しい。あこがれの人の、私生活。

「いいなあ」

「あ、でも。はぶらしはふたつ、あったよ。せつこちゃん、ざんねんだったね」

「うっそ。まじで!？」

それは衝撃だった。浮いた話のまったく出ない人なのに。私は項垂れた。

「まあまあ、せつこちゃんにはわたしがいるよ」

ね、元気出して？ と今度はととが私の頭を撫でようとしてくれる。それも結局すり抜けて端から見ると幽霊が私の頭に手を突っ込んでいるように見えるのだが。それでも私の心は寒い冬にこたつに入っているときのような温かい気持ちになった。

「でねえ、ととってば超かわいいの!」と私が酔っ払って友人に話すと、

「節子、それ名前やない。メーカーや」などと指摘されてしまった。